駈けてくる朝

畑山 博

駈けてくる朝

畑山 博

中央公論社

松本市図書館蔵書

駈けてくる朝　定価六八〇円

昭和四十八年九月二十日初版印刷
昭和四十八年九月二十五日初版発行

著者　畑山博
発行者　高梨茂
印刷　三晃印刷
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

©一九七三　検印廃止

駈けてくる朝

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

駈けてくる朝　5
みんな手首になってしまった　107
午後の寓話　151
ミミンググングの哀しみ　167
けれど心は薔薇のように　177
いとしのジンジャー　189
風　203
あとがき

駈けてくる朝

1

あれはなんの臭いだろう。ぐっと身体を近づけたときの、塩崎光子の息の臭いみたいだ。いや、違う。そんななまあたたかく、ぬめるような感じじゃない。もっと硬質な、さわやかな感じだ。小さな臭いの粒子の一つ一つが、尖った先端をもっていて、ちくちく鼻孔の粘膜を刺してくる、そんな感じだ。

焼けたガラスの粉末みたいな、針葉樹の花粉を含んだ風のような、そう、そう、そう、そうじゃないか。あれは、アカシヤの葉の臭いにまちがいないよ。キリンが、アカシヤの葉を噛む臭い。キリンの歯ぐきから滲み出る唾液の臭い。アカシヤの葉脈が砕かれて、葉汁が土の上にこぼれる臭い。

立(りつ)は、真新しい屋根なし貨車の隅に背をもたせかけ、膝に機関銃の銃身をのせたきゅうくつな姿勢のまま、じっと振動に身をまかせていた。

いきなり鉄橋を渡る音が、足下から突き上げてきた。一瞬立は、床についている手に力をこめ、

瞼を押し開けてみた。闇の中を、何か黒い大きな鳥のようなものが群って、飛びすぎてゆく。そう思った。が、瞼はすぐに重くまた閉じてしまうのだった。

それにしても、どうしてこんなにキリンの臭いが気になるんだ。こんな小さな屋根なし貨車の中に、アカシヤの樹が生えてるなんてわけ、ないじゃないかよ。寄り目の奴だって言ってたろ。タンガニーカ湖の東側を故郷にもつキリンは、ぜったいに、立ってでなけりゃ、餌を食わないって。こんな小さな貨車の中で、キリンとアカシヤの樹が、並んで背伸びをしているなんてわけが、ないじゃないか。そんなだったら、列車はどうやってトンネルをくぐるんだ。

それだもの、キリンは、床にまだら模様の首を押しつけて、あぐらみたいに脚を交叉させて、睡っているにちがいない。キリンが灰色の厚い舌の先で、小枝のとげにかるく触れ、まるでそのざらついた感触を味つけのようにしてくるりとアカシヤの葉を巻きこんで食べてるんだと思ったあの音は、いびきの音にちがいない。立は息をつめ、さっきよりもさらに深く背をまるめ、膝の機関銃の上に頬を押しつけた。

40kh。どこまでもどこまでも両側を錆びをかぶった貧しいアパート群にはさまれたゆるい下り勾配のレールを、列車は、ときどき先頭の機関車のパンタグラフに鋭いスパークを起こしながら、走っていた。十二トン積みL型冷蔵車とワム型有蓋貨車がほとんどを占める四十九輌編成の列車のほぼ中央に、塗料の光沢も真新しい屋根なし貨車が五輌、連結されているのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

〈この体毛を包んだちり紙は何なんだ〉
〈……〉
〈何で封筒になんか入れてあるんだ〉
〈知らないですよ。ただ、おれ、来週の金曜日まで預ってくれって、言われただけなんだから〉
〈誰に預ってくれと言われたんだ〉
〈やまてせんですよ〉
〈何だって〉
〈知らないですよ。ほんとの名前なんて。そいつが自分で、やまてせんって、言ったんだから〉
〈警察を愚弄すると、貴様、どういうことになるか、分かってんのか〉
机の上に乱暴にばらまかれた腕時計、鉛筆、手帳、アパートの鍵、定期。次々につまみあげては、ぽうんとまた放り捨てながら、その中年の巡査は言った。
〈お前は、どうして、今夜はボンドを吸わないんだ〉
〈そんなもの。ふうてんじゃあるまいし。たばこも、おれは、吸いやしませんよ〉

〈警察というところはな、西郷さんの銅像のまわりの写真だけでもな、一時間に四枚ずつは集めてるとこなんだぞ〉
〈そんな罠にはのせられませんよ〉
〈口の言い方に気をつけろ。軍隊だったら鼻が曲ってるとこなんだぞ〉
〈……〉
〈池袋から亀戸まで、こんな立派な国鉄の定期券まで買い与えられているのに、どうして真直ぐ帰らないんだ。あんな所で、何をやっていたんだ〉
〈何もやってやしませんよ。ただ、ガード下で、たまたま隣に立ってたやつの話を聞いてただけですよ〉
〈どんな話をしてたんだ〉
〈いいかげんに帰してくださいよ〉
〈どんな話をしてたんだ〉
〈会社を終えて、ちょうど給料日だったから、何となく駅へ行ったら、青森行の特急に空席があったっていう話ですよ。で、乗っちゃったら、国鉄っていうのは、次々に連絡する乗物が待機しているもんだから、あんまり便利がいいもんだから、つい乗り継いで行ったら、気がついたら礼文島まで行っちゃったっていう話ですよ〉

〈ばか野郎。いいかげんにせえよ〉

巡査の手から放り出された腕時計が、机の上に落ちずに、コンクリートの床に落ちた。

□NO1。確認四十六年六月十日。男。十八、九歳。一六五センチメートル。中肉。顔大。ひげもじゃ。国防色シャツ。ベトコン旗模様を染めぬいたズボン。ゴムサンダル。足の爪を黒色に染色。住所、本田管内、京成線立石東立石。

□NO2。確認六月十五日。女。十八歳ぐらい。小肥り。丸顔。色白。赤色水玉模様半袖シャツ。国防色ミニスカート。通いふうてん。住所、千住管内、柳原。

□NO3。確認六月十五日。女。二十歳ぐらい。一五七センチメートル。白半袖ブラウス。右腕に入墨。蝶。日によって色が違う。セロテープか。住所不定。

時計の針をこわしてしまったことの照れかくしだろうか。巡査が急にめくりはじめたタイプ刷りの冊子。が、それもほんの一、二分のことで、ふたたび閉じられたその表紙には、四十六年度上野駅付近出没若年浮遊人白書と大書してあった。

〈海を見に行かないか。ね、行かない？〉

空港サービスの下請け会社をやめて、今のトラベル会社へ入るまでの間三週間ほど、アパートでぶらぶらしていたことがあった。ある日、ふらりと出かけて行った上野駅南側のガード下で、いきなり学生ふうの女から声をかけられた。

ミイラ研究今昔という、かなり厚手の高価そうな本をブックバンドでしばって持ったその女は、ちょうど下田ぐらいまで行って帰ってくる一人分の電車賃ならあるんだけど、あんたの方はどうおと訊いた。市原のヘドロの海あたりまでなら行けると思うよと答えると、〈行こう。そっち〉背の低い女は、ぐんぐん先にたって歩きだした。

国電の出札口につづく階段を昇り、土産物の売店のある通路を早足で歩いた。それはちょっと異常なくらいな急ぎようだったので、つい立が周りの目を気にして照れて歩いているうちに、女は雑沓の中にまぎれて見えなくなってしまった。

でも、そんなことを、この腐ったまぐろの切身みたいな唇をした巡査に喋ってみたってはじまらない。帰る途中、わざわざ電車を下りて、あのガード下やマンホールのあたりでぼんやりと、二時間ほどすごしてゆく気持が、分かってもらえるはずがない。立は、こわされた腕時計に手を伸し、ゆっくりとズボンのポケットにねじこんだ——

隣に腰かけた中年男が、頭の上で両手を組み合わせているので、腕時計の音がよく聞こえる。それは、疾走する電車の激しい金属音のために今にも嚙み殺されそうになりながら、鳴りつづけている。

いや、本当は、電車の走行中はほとんど聞こえはしないのだけれども、巣鴨、田端、西日暮里

と停車するたびに、短い時間を精いっぱい鳴りつづけ、立は、その余韻だけを聞いているのかもしれなかった。

「ふん、何が器物の耐用年限だってんだよう。何だってんだよう」

腕時計の主は、ネクタイの結び目をだらしなく胸にたらした恰好で、池袋からずっとそんな言葉ばかりつぶやいている。

吊り皮のあの女のコ。どこかで見たような顔なんだけど。水色の細い革ベルトをしてうつむいて、文庫本を読んでいる。腋の下にハンドバッグと一緒に抱えている茶封筒。もう少しでそれが落っこちそうだ。

九時四十分。マンホールは、これからが一番賑かな時間だけれども、やっぱりきょうは寄るのは遅すぎる。いや、それとも。もうひとつき以上も逢えないでいるあの男に、封筒を取り上げられちまった言いわけをする必要があるし。立は、急にむずがゆくなりだした尻をシートにこすりつけ、身体をひねり、暗い車窓の外に目をやった。

いつかこんな絵本を見たことがあった。イルミネーションで縁どりされた巨大な毒きのこが一つ、五つ、九つ。生ぐさい風の吹きこんでくる車窓から、ぐうんと腕を突き出してやったら、指先で潰れて汁でも吐き出しそうだ。紅。ピンク。汚れた黄色。とりどりの色彩をもった光と、艶のない闇が、同質の細かい粒子になって、ビルの間を飛び交っているような、波長の短かい摩擦

音をたてて飛び交っているような、上野の街が近づいてきた。
車内の乗客の大半が、網棚の荷物に手を伸したり、膝の上のハンドバッグにハンカチをしまいこんだり、そわそわと動きはじめた。チューインガムを噛みながら夕刊を読んでいた左隣の男が、いきなり新聞をたたみ、窓ガラスに顔を写し、立ちあがった。
電車が下手くそなブレーキのかけ方をして停まった。甲高いホームのアナウンス。停まったとたんにもうせわしなく鳴りだすベル。突きとばし合って下り口の方へ集まってゆく人群れ。人群れの後に残された青いシートの上に、読み棄てた新聞がのっている。
〝留守居の若妻殺さる。
文京区××コーポ。一等航海士の妻〟
手を伸して立が新聞を拾おうとしたのと、斜め前に立っていた女が腰を屈めながら手を伸したのと同時だった。
あっ、あっという両方の低い声のぶつかり合いの後、「ごめんなさいね……」女が言った。
革ベルトのバックルの真下から、小さい菱形のボタンが縦に並んでいる、前開らきのスカートをはいた彼女は、文庫本を茶封筒の中に押しこみ、また腋の下にはさんだ。
「ごめんなさいね。網棚に上げようとしたんです。あなたのだって知らなかったから……」
「おれのじゃ、ないんですよ。拾って読もうとしただけなんだ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com